

滑替
合入

忠臣藏偏癡氣論

式亭三馬
著作

下



3
2414
2止



へ巻13
24/4
巻 2止

希倉
雁書

忠臣蔵

忠臣蔵偏癡氣論下

○戸無瀬

式亭三馬再校

大正五年十月
室井平蔵氏贈

こゝにせんの儀が始なるは紙あはらじ。うごぐみ
ら〜ん花車ら。仲居のさうり上りまら。女帝
の果る。持ちて侍の娘あてらあるまじ。判
交よりカ孫使者の儀。小浪ふた次させん
とて。らりりて扱をあこし。アイタ。あのこと取若

の奥さるぬの守まもとありてぞあまへあまのおくこれ何の
るるぞや。ちりきやう花車はなぐるま風のせまひひとて。或士
の女房にやうらひのわくわのわをううららのらト。つらつ判はん友ともより
のな狭せまくくゆゆへへ大切たいせつのしや使者しや家け来らいのにやうらひ
のな狭せまくくいいろろきき小こ女にやうらひ小こ女にやうらひ狭せまくくととる
ををううららのらとと瀬せむむ。中な一いつ使者しやへへ對たいししのの失しつ礼れい二に
ああのの狭せまくくゆゆがが屋や敷しきのの風ふう後ご自じ墮だ落らく不ふ
ここええてて外がい聞もんああじじ。うう一いつ使者しやへへ云い号ごうの

播はああもも廿によよ今いま日にちのの表おもて向むかのの使し者やちちれれババをを
ををううららのらぬぬ若わ者しや。若わ狭せまくくゆゆ小せう身しんううりりとともも。玄げん関くわん
番ばん五ご次じ役やく人にんちちととああるるべべきき若わ者しやとと。ここ小こ若わ狭せまくく
ゆゆ。ゆゆののここくくととりりよよてて一いつ間まををかかけけ出で。カカ強じやう不ふ對たい面めん
すするるもも。町まち人にんめめききててゆゆりり煙えんぐぐ。ままははささててととぬぬ。
戸とををぬぬへへ小せう波はとと連れんてて山さん科かへへゆゆててのの大おほ不ふ出で来き
ささららるるりりななううととささららりり一いつうう十じゆ中ちゆうでで不ふ手て際ぎはなるる
度たび。一いつくくかかぎぎららるる小せう違ちがああららむむとと。久くくくくくくく九く段だん

目の仕うちをえぬよべ。

○小波

こまの端な

○かふよ御前

初段義貞の境を嗅あてらるる。さのこまヤンヤと
ひふあぶらのまゆもあらしむ。ね忠臣藏の強勃
へかあぶらのあさむらゆあ強まらり。たとひ師
侍の急慕ありとも。小夜夜の古哥あて

秘しむるらん。ゆるかふをららふべきをた
かくて夫判友大切なる役目の當日。いざ
草文のおおへて夜中お持でや。出陣身一
あふ万事師範なる師あへ。あてとまりの哥
とえせはけしん。後を立とりらぬむりの仕
方。扱く了簡さるる女子。夫判友を大切
あふ。密夫とるこそころる色。師をあやほ
あててけあの役目万端。あてらるる。あえべ

するがよ。とれ貞女の道を知て行を知ら
ざるなり。

○早野勘平重氏

勘平の人を殺して金銭を奪い大賊の後日
ふこそ親の敵とらるる志とれども殺せし
時ハ真の團旅人を殺し金銭を奪いお遠
なり。是大賊の燈籠なり。そ色ハさく。宿
屋へ入りてある時。男と一室に人お殺されとて

戸板おのせて持あるふ。いふ我殺しと怪文
お合はんとて。お由急死骸をあらたけんごうや。
掘て殺しとふお遠さう。それハ死骸お
なすも。一あり。焼く殺しとて。と述て。
其後お切腹せざるや。よ。男ハ横死あも。ま。
病死あも。ま。そ色なり。あ。て。見向も。甘ぬハ
い。の。心。ぞ。や。我家の。狗。犬。でも。死。ん。ご。と。せ。つ。バ。
人おた。り。れ。て。死。ご。う。番。木。鬘。でも。食。ふ。ご。う。切。

きてても死しごう。病かまひでも付つくこと。一いち巻まきへえとをけり
うら。死し終すてるさうらう人ひと情じやうさうり。いふんぞ男おとこの死し骸がい
どわしうらえごうや。是これ則すなはち致いた炮たう祇ぎ小せうあうざれ
バ切きり後ごあもあよをぬるさうり。不おれ念えんの至いたといふ
べし。か伊いうらな鹿そ相さう者じや。何なにぞ敵たう討たうの仲なケ同どう小
へづき。そ初はつ年ねん判はん友ゆう大だい切きりの役やく目め成なり衆しゆ衆しゆ。一いつ世せ
一度いちどの晴はれの登と壇だん。そ供とも先まあて女おんな不ふ戯ぎれ足あし利り
忠ちゆう義ぎハ幡はた宮みや社しゃ系けいの陣ぢん所じよと擇けりし。あまうさ

うら判はん友ゆうが夫おつ切きりの場ばあも有あり合あひさごと。狼うら狽だ
馬まうて切きり後ごせんとあうりしへ。あうるおあうと
うらぬをうりのとせうけし。案あんのどくえうり
後ごハ切きりらぬまきまねた。女おんなの古ふる路ろまらあやと
さうり。そう情じやうより女おんなの親おや置きへ巫まじ女によハ例れいを死
腰こし抜ぬさうり。但た一いつ門もん一いつ家けもさうさ身みさうる死
又またハ親おや影かげ系けい系けい向むかもさうらぬといふおあや。さう
うても仕し方ほうのあうるさうさ。扱あ獵り人とたうり

夜山よやま小出しやうこ古傍輩こきやうかいの千崎せんざき弥五郎やごろう小出しや合あひ
面目めんかくちのこの側たがはの者もの不ふ用よう金かね紙し綱つな人ひと夫つまと
カか小こ出し合あひなりどぐ云いがらら不ふ成せいて出い来きももででぬ
金かねのの才さい覚かく不ふ男おとこ中ちゆうで紙し他た多たふふけけ。不ふ忠ちゆう不ふ
孝かう限げんアアままののまま奴やつなり。ままののままううううううむむでで衣い服ふく
ととええるるふふ。世よ不ふありし時ときまま人ひとより拜まゐ領りやうし
るる定ぢやう紋もん付つの時とき後ごと。ををままくくふふ仕し立たてたてたしし。
平へい肢しくくして山さん野やとと蒐しゆせせり。大たい切せきるるままの

定ぢやう紋もんと猪ちゆう猿えんの血ちゆうははああてて糝せんしし臭くさくく糝せんししをを
白しろいい不ふ觸ふるる。不ふ敬けい譬へいんんううここななしし。六む月げつ亦また
九く日にちの夜よ猪ちゆうとと止と止とてて山さん鯨かう店てんへへをを用よう
ささののままににああらられればば肉にくハハ瘻ろうををおおめめてて皮くわいををううり
の直ちゆう歩ぽななるるべべしし。愛あいららがが素す人ひとららままににああるる。
但たしし一いつ糸いとのの毛けハハ夏なつ毛げととりりひひてて糝せん受うととるる
ゆゆ急きゆう猪ちゆうもも夏なつ毛げハハ能よおおめめやや。我われハハ羊やうををふふ
ああううぶぶららババそそととままららううむむとと。且かつ火ひ繩じゆうをを振あて

猿小通づき。火繩を消とりしる。猿人あり
似合ざるなり。其より猿絶めて二ツ三ツ擲き
するも懸猿うんる。闇ありもあつるべきこと。繩
擲して足とく人初て猿人と云付らるべき
つゝの狼狽申す也。コリヤ猿人業ハあつるごとく猿中
とさぐると大癡呆。二ツ玉あて止るるのぶ
せありさして百什つゝもとも獲甦るる
あるべきや。幼平かくまでうらうらあるのろ。玉

ふあつる金毘布。天の衣へと披戴さし
いう。世のたしくあも天道人教さごとく
あつるといぞ。人を教し金毘布とりて天道
どこの玉おれあるべき。扱彼毘布を猿申す。
楮より先へ逸散小菟出でし一日三十里の
早道の達人あるなり。実あ孫め名。小別
よりあも孫更なり。且孫め名もいそぐ
天道のるるなり。遙小のびるべき哉。

其の夜のうちに退去して。彼も十あといふ金糸
後し。夜明けて宿をへくゆき。あつるが身賣
のかりさめり。其の一文字金の高直まが曰
あれがゑて居るけ。單物の。縞の裁で振る
金材布と。襦袢と。我懐中の縞の
絨布と。えらぐて。の天。ちが。一益。あも立
ぬ。虚財布と。懐小持て居るか。馬鹿律義
あり。まあ。毎親ふ。足付ら。絨布と。引出し

ての。赤擲。つく。藤相子。乃なる。男。宮初。豫念
の。強勃。不。狼狽。又。維。疾。あ。六月。廿九日。より。
今日。七月。朔日。まで。うら。え。出。揚。句。の。果。
犬。死。し。る。や。と。者。血。判。さ。せて。義。士。の。仲
る。人。加。く。し。ん。や。右。傍。の。孫。み。弟。あ。人。が。越。交。る。
べ。按。む。る。不。足。利。子。氏。時。代。の。後。絶。は。
弓。あ。て。あ。る。べ。し。文。字。の。様。も。る。後。又。後。世。の
杜。撰。後。人。より。可。考。又。曰。治。郎。天。窓

赤お山あかやま當世様の長相織ながあやうぢりあやうとしこ
祇園ぎげんの揚あきをるまど。とよてる氏時代の物とも
賞あきえと。是これ又杜撰まじまじ。その外勝計まかつけいま
うううう。

○鷺坂伴舟

伴舟の忠臣院中才一の忠臣。且夕師直小近
侍かみして一もふ遠とほのぞ。竊ひそ小妙計ひそを以九方丈
とまがけ。深ふかく敵中てきちゆうふ入いて大星おほほしが測あそ底こと探たづる

あらのとちうちうとむ師直しちゆう宛ま後の附つるらの粉骨こなほね
碎くだ身みして忠戦ちゆうせんとまま一い本ほんをもかかくくむむ其その場ば小
て付つ死ししるるの適忠あてちゆう臣しん教けいして不違たがひ勞らうして不
怨能うらならら紙し知ちるとりふべき也。但た一いちちちちふふ急いそ暴ばう
のるるの伴舟ばんしゆうとりども木竹きちくででいいちち男おとこのあこ
里さとまま心こころのままちちちち

○おかる

あちちり。ひいのおてんを女めとといいけけおおるるととううて

りふべきまうりかやよいざん小夜さよ夜よの古こきと書かき
師しと人ひと駈かくんと志しさりしが混こん雑ざつの中なかる遠とほふ
まのりのもほは「マア今いま宵よのよふせうとあり
とおかるの幼おと平へいふ逢あひささす何なにのマアけあ
の一首ひとしゅや二首ふたしゅの届とどまさうあどるのまいる
にあるまのとありやうふさうめ凶むつ産やちう中ちゆうをらうと
女の身みめて折しやう助すけ一人ひとりと供とも小こ連れんれはひ一ひと走そう小
ちうつて来きこア志しんとやと幼おと平へいを撲ぶ目めでん

まがら吐と息いきつく光あり景さま淫らう婦ふの面つらの憎にくさい奴やつ
が今いま宵よ文ふ糸いとを持もて来きむら判はん友ゆうの身み小こ別べつ條じょう
にあるまどきふ。是ぜい非ひもあつる色いろの及およぶ。ま上
幼おと平へいが身みとちうと一ひと寸すんくと接せつ掛け入い引ひ連れん行ぎやう
幼おと平へいが氏うぢ士し紙し捨すてさやも皆みな是これちうるが罪つみ
ちうるむや。け後ご幼おと平へいと体てい内ないと急いそ政ぢやうの附つふ
ちうるとたぐいふあうそ入い里り。其その男おとこぶうとえふふ
幼おと平へいの色いろ生なま白しろく我われちう細こ葱おろしとらひ秘ひの瘦せう

夫壁をくぐり小姓よりこせうよりの寺侍てうざうりの如き弱宗男じやくしゆおとこ也。
夫小引久おとこひひ。体内ていだいの色いろ悪わるく肥脂あぶら付つ苦味くみあり
て天暗あま武士ぶしめきさるる男おとこあるれども。あつたが
性うせ質つみ馬うまの衣うきあて育そだちる百性ひやくせうの娘むすめゆゑ舎せま見
や伯父おやぢいの色いろの悪わるき奴やつえ倦あきらぬや至さい後ご勤きんの
年としをとるあど。強まことみく感心かんしんな浮虚うききよ者ものあて。
色の白しろい瘦せうまを。奉ちんの色いろ男おとこと古風こふう不あやま
と奴やつあるれや男おとこらき体内ていだいを揚あげて物もの平へいと

垂ありの也なり。叔あや親せき里り不ふ立たゆり。用金ようきん方かた是これの爲ため
とそふふ二親ふたせきと相あひ續つく。夫おとこあもあつらさぎと抵ぎ園えん
町まちへ身みを售うるや一代いちだいの大出だいしゅ來き也なり。夫おとこより
一いつカあて兄あに平へい右みぎあつた物倍ものばいを雙ま。愁あう歎たん左ひだり
まがら。其その洞ほら不ふ勿な俸ちゆうあいの爺おやさんへ非業ひがうの
死しでもか年としの上うへとへ。叔あやく卑ちやくあききらり
るるや。是これでい爺親おやせきの死しが紙古かみこ古こ瓶びんでも
歩あ破やぶさあぶらの心持こころもち小使せうしえて。親おや子の情じやう合あひ

志為し。夫ふ引之。幼平どのの三十ふまるや
あらしむるふりぬるのん[○]悲し^{うま}く朽惜^{くちやく}うら。
あひ^{あひ}さうら^{さうら}こ^こであらうのふとら^{とら}あま^{あま}り^り片畏^{うら}負^ひ
の愁^{あは}歎^{うん}就^{まうん}中^ぶあひ^{あひ}さう^{さう}ら^らこ^こであらうのふとら^{とら}
あ^あら^らる^るよ^よう^うわ^わど^ど自^う惚^ねと^と詞^{ことば}之^の後^{のち}尼^{あま}と^とあ^あり^りて
ゆ^ゆく^く處^{ところ}と^とあ^あら^らむ^むど^どあ^ある^る人^{ひと}曰^{いわ}あ^あら^らる^るが^が身^みを^を沈^{しづ}
し^しを^を貞^{てい}女^{ぢよ}と^とり^りよ^よべ^べう^うら^らむ^むど^ど。媼^{おん}礼^れ放^{ほう}蕩^{たう}の^の性^{せい}災^{さい}
ま^まれ^れば^ば好^{この}んで^で身^みを^を賣^うし^しの^のと^とら^らる^るを^を退^{ちゆう}て

監^{くわん}る^る小^こ三^{さん}日^{にち}居^い續^{じつ}の^の中^{ちゆう}良^{りやう}之^の助^{すけ}が^が為^{ため}俸^{ほう}床^{とこ}は
の^の客^{きやく}と^とら^らえ^えさ^さむ^む。是^{こゝ}て^{こゝ}考^{かんが}め^めべ^べし。

○大星カ弥

殿^{との}の^の巾^{あしき}手^てを^を慰^{なぐさ}めん^んと^と鎌^{かま}倉^{くら}山^{やま}の^の八^や重^へ九^く重^く。
色^{いろ}く^く搦^な花^{はな}を^を献^{けん}む^むる^る甚^{こゝろ}不^ふ審^{しん}之^の。主^{しゆ}人^{にん}判^{はん}友^{ゆう}
ハ^あ扇^{あふぎ}ガ^が谷^やの^の上^{うへ}至^{いた}菱^{しやう}。大^{おほ}竹^{たけ}由^{よし}て^て門^{かど}戸^こを^を閉^{とぢ}て
菱^{しやう}し^しと^と団^{だん}門^{もん}之^の。あ^あら^らる^る小^こ鎌^{かま}倉^{くら}山^{やま}の^の接^{せつ}を^を折^をり
あ^あら^らる^るハ^ハ力^{りき}強^{ぢやう}不^ふ解^げでも^もさ^さへ^へと^とた^たよ^よし^し解^げ有^{あり}とも

閉門と飛越出入る。足利家と怨むざる不届
のあるまゝ一萬一萬頭せむ主人判友罪不罪
とまぬるる。懐まぶらんばあべうらと浪人
して後夜中不祇園町へ急用はせざる
あり。月の入山科より一里半。息と切る俵
力強が鳥俵。天窓と紫の帛紗包あして
紅絹の脚半とをまゝする形容。其いぢぢら
る。火事不遇する串童が。供不をぐとて遊。

が如し。げふ幸落が洞あつるる。親小劣
らぬ俵力強めがただけ。かゝる虚弱の性
質。まゝや夜付の時不備す。吾等の折ゆ
立合ふとも勝負者ふるべし。思又小波と
縁廻云約ましくうら。力強が為ぬ幸落
ハ勇あり。能くを錢玉ふとるる。いふぞや
完初より力強在宿のりあれば。か不ふ
むぐりき合ふらうら。かけ出て

えさうごらや。一方ハ母。一方ハ男。いふは小怪我過
が有りてもさうぬ大切のあ人。さう者を笑ま
がら。あふさううこんで居るさうふ坊さう。
幸為が心底うちありさう人。たあさう
して小波を妻扱めさう其報えあさう
。けちさうい妻さうい味さうい程さういれども。
若輩者のさうなれば後で論でさう。中々之
ゆが丸めさう。霊の継力強解けて甚妙さう。

父由良之助が日陰者の比喩扱めて拙
空中塔を散まるといふべ

○原郷右衛門

人小媚諂ハ侍でさう。武士でさういさう古
風さうとりよて。當世とさういふ。各番者師座
の音物も。國産の腐物。食りもさう乾魚
さういふ。師直が立腹さういふ。さう
九ちまが曰。けち強勃のえさういふ。さう

どのころこの春雷。あつぎうううううう。金
銀と以面とをりりりりりり。かやうまのり
出来中さぬと云。是九をまが金言なり。
々々々。人小端小の武士であるといふ口の
下う。花の開くみのあれれれれれれ。れれれれ。
閉門も免さる。吉事の免れ向など。
ゆううううううの洞。又りや九をまがなり
ろりりりりり。九をまがりりりりりり。々

右米つら舌も乾うぬ向小判友の切後しう。
按むる小理小暗き男と見えう。其後浪
人して結平が家小存り。結平切後の場小
至らて。始終糸み糸が尻小付てけけ。適
けけ出まるとまふ。ろくばくけ金の。綿の財布
の紫摩黄金まどろ洒落て。手負の痛も
かまのまをる。麻とほろろ。別てゆる門に。糸
み糸も同じく。役者あて。首小をるけ金

心算と勇の七七日四十九日や五十両合て
百あ百箇日の追善供養吊られよ。なご
家内の混雑ともあひやらざと。かけ合のか
昼爰洒落とん飯下情不通でぬる也。

○石堂右馬之丞

け男毒あも茶あもろくぬとええれば
論る

○山名次郎左衛門

心正直あて勇氣逞きゆゑ。後の内と洗ひ
沸へふぶらまけて志まひ齒ふ衣着せむ
かりこめて志まへ。次でさろりさるとの
氣性より。切後の坊あて判友が失礼と
外りる洞く理の當終らう。旦夜付
の坊ふ至らて伴内と俣ふ潔く付死志と
すへ通勇者らう

○芥定九郎

評ひかりよる小足こたりらぬ奴やつ。まじと一玄いちげん束つかが懐かたふ
 全ぜんらるる四五四五十兩十兩の嵩かさ綿わたの絨布じゅうふ小入こいれて
 むらすでえとらるる眼力がんりき。流ながる血ち。筋すぢ
 あらそわのきど。されど剪徑せんぎやうとすで落おち皚あ
 しんえ下果かげらる奴やつ九くちまが面釋めんじやくしりか。
 ○千崎せんざき弥五郎やごろう
 後炮こうほう疵きずあは似にられども是こゝハ刀やいばで忍しのび
 疵きずと。与よ一玄いちげん束つかが死し骸がいと改あらて幼平ようへいが寛かん

の難なんを救きうしん。あつをき出来できらる。其その外ほかハ竹たけ
 と伯仲はくちゆうの間あひだまればら小倫せうりんせむて。

○猪いのち

世よ小ありふきし猪いのちとん形かたち小く異こと之首くちらちひ小く
 小足こたり二ふた本ほんハぶらまるとぶらさぐりするの
 ちて。後足あとあし二ふた本ほんあて蒐出しゆしゅつせり。け後あと足あし人の
 足あし小急ちゆう近ちかし。其その歩行あゆみ小急ちゆうとぐらてあつら
 三さんテレウてれうたえれつくの者ものあり。何猪なんちゆうとらりて

猪の種類いのちなるべき殺獣ころせもの屋や不問人とくどもあつて
本草家ほんそうも未詳まひじやうとりよ何なにあも甘あまよあま形かたち甚しんど
とらとら考かんがべし。

○百性と一兵衛

子の為ため不夜道よめちうともりつとつどつど勞らうして功こうありき
非業ひがうの死し。忍しのびぐりうんうんどど忍しのびて勿な俸ほうま
がとくさんさんハ非業ひがうの死しでもか年としのううななど
娘むすめおかるふりららとてと一向いっかうううずずぬりぬりのの戸と

あらむむべー南無阿弥陀佛南無妙法蓮
華げ經きやう。

○与一兵衛妻

幼わらわ卒そつを眼まなこての洞ほらつつ埋うみみ逼せましてしてををなり。
おもくおもく妻さい婦ふなならら掛かひひもも掛かひひ不幸ふこうの
くぐくぐるる就す中ちゆうけけ老母らうぼハハ夫おとこ与よ一いつ兵衛べいゑ幼わらわ
卒そつ不ふ死し別べつきき熱あつ心しんの卒そつああららハハ不ふ定ぢやうめめむむ
菟うああららくくゆゆ名な内うちへへととてて夫おとこああつつるる。娘むすめああららるる。

あへ生別也。身一ツといふな。けん後かうる
尼とありしゆゑ。俱小菴室小燈ひらん
あゝらむ。

○一文宇屋才兵衛

○りりあう弥八

○種筒島の六

○狸の角兵衛

右押のく論なり

○寺岡平右衛門

雁が飛べ秦亀もあざんとてかろ。強念を
三ヶ月がる非人とありて解結くども。敵ハ
用公者一々色バ函素るる。叶りぞ。退後と
あひしが國の叙をあひ出。まごくとあじ
とん足輕お葱の了等あり。尺十餘人の要士。
粉骨碎身してさへ討とせらる。平右衛門
一人非人とあるらゝぬのるりあて。まふへき

敵小あらしむ。其弁端むる小はらうむ。小者
の悲さ。蟹ハ甲小似て空知掘る。卓量
小く。

○ 矢間重太郎

○ 竹森喜多八

人足あげき揚を小ありて。縁念入お立
時候へららびでござるの。イヤ一味連判の者たへ
見せしめさど。あらしむ。高くと罵る

吾分別。燦茶一。あくのみぬる小。はまらぬめとの
腹くあやすり入す。まの裏うへも
表裏の侍。是等ハ人ぞりまの一味同むる
べし。

○ お石

お石ハ実小武士の女房あり。洞のちくく
まろくくお和らう小。鼻も茹りて。剛も吐る
勢あり。戸空瀬等と同日の倫小あらしむ

○天川屋義平

義平は任侠なり。亦小倫なり。志ろくは忠
も亦色。家老職の望良き。ゆより猶物とあり
バ先一懸へ交べきなり。礼物交うとて命がけ
のおせらるや。さぬとの一言甚昇。うけぬ
のこたうらむ。進物を足めて。蹴毬とる。け
よもあまき。非礼なり。町人の町人。所以に。

○大田了竹

昔から移るな。うぬむとりの娘を義平
嫁よつゝ。二三年も連そ。うゝ人。何の訳
もららぎ。叙了竹。方へう。一。既。了竹も
聳のる。なう。娘の更。あり。披。なく。一旦ハ
あづり。あ。く。物の。換。る。知。る。移。る。公。評。なり。
後日。小。聳。義平。う。ゝ。人。子。細。を。た。ら。ぬ。事
ども云。む。志。ろ。く。は。り。の。事。で。語。り。あ。も。迷。惑
たり。今。ま。で。の。あ。り。小。引。を。ま。は。し。それ。も

たうらうむらゐらりそらるるをせされぬらとの
表^{あひ}對^{たい}へ。自然^{じぜん}の道理^{だうり}ふて。了^{りょう}行^{ぎょう}ふとこしも
多^{ちやう}理^りまし。目^めれくるらるるに^ま初^{はつ}終^{しゆう}る時^{とき}候^{けう}を
心^{こころ}し。隙^{ひま}あるものろ。終^{あつ}らぬものろ。け二^に心の抑^{おさ}
小^せ出^で。流^{なが}石^{いし}了^{りょう}行^{ぎょう}老^{らう}の医^い業^{ぎやう}もせらるるに^か終^{しゆう}
の人物^{ぶつぶつ}ゆゑ。學^{がく}問^{もん}も有^あ。公^{こう}ふちのうらうら^{ゆう}優^{ゆう}る
坊^{ぼう}雨^{あめ}もあつて。先^{まづ}角^{かく}をし。不^ふ終^{あつ}りおくる。
誠^{まこと}小^せ温^{おん}厚^{こう}の君^{くん}子^しとりよべ。世^せ間^{けん}け人を

そらるる夏^{なつ}謂^{いわ}なり

- かその
- よし松^{まつ}
- 伊^い吾^ご

論^{ろん}
ら

忠^{ちゆう}臣^{しん}藏^{ざう}偏^{へん}癡^ち氣^き論^{ろん} 大^{だい}尾^び

明治十五年八月三十日翻刻御届

著者兼
原版主

出版人

故人

式亭三馬

東京府平民

江嶋伊兵衛

日本橋區通四丁目
拾番地



東京芝三島町	山中市兵衛	東京兩國橋	松本平吉
同 銀座三丁目	山中孝之助	同 南鍋町	武田傳右門
同 同四丁目	山中北郎	同 弥生門町	小林鐵二郎
同 横山町	辻岡文助	同 通三丁目	齋屋吉藏
同 油山町	水野慶二郎	同 南傳馬町	品川朝次郎
同 馬喰町	荒川藤兵衛	同 浅草茅町	木屋惣兵衛
同 同	石川治兵衛	同 馬喰町	伊勢屋金次郎
同 通壹丁目	大倉孫兵衛	同 通壹丁目	兒玉彌吉
同 室町	滑稽	同 兩國横網	

珍堂出版滑稽戲作目録

道 中 膝栗毛	十返舎一九他 東海道
道 中 膝栗毛	同 画十八冊
道 中 膝栗毛	十返舎一九他 奥羽道中十番
大略日ウタ 音(餅)成 滑稽二日解	十返舎一九他 武冊
浮世 滑稽六あみだ指	十返舎一九他 初編武冊 二編武冊 三編武冊
馬耳 滑稽大師次郎	十返舎一九他 三冊
水子 滑稽餘史	曲亭馬琴他 壹冊
廊 中 掃除	同 他 壹冊
傾城怪談客物語	武亭三馬他 壹冊

一 盃 綺 言 式亭馬也 壹冊

忠臣藏編 癩氣論 同他 壹冊

田舎芝居忠臣藏 同他 壹冊

狂言田舎探 同他 貳冊

行麻疹北涼言 同他 壹冊

廓 蕪 用 同他 壹冊

辰巳婦言 同他 壹冊

同 紅頭保也 編 同他 壹冊

四 京傳餘師 山東京傳也 壹冊

傾 城 鱗 同他 壹冊

小 紋 雅 結 同他 壹冊

契情買虎乃卷 同他 壹冊

和能 新造園彙 同他 壹冊

七 精面草 同他 壹冊

結方 娼妓結ぶるひ 同他 壹冊

洞房 志げく平話 同他 壹冊

夜半花屋種 同他 壹冊

青梯 の世累 錦乃裏 同他 壹冊

東京 同

北畠茂兵衛 稻田佐兵衛 山中兵衛 稻田源吉 小林新兵衛 丸屋善七 小林新造 穴山篤太郎 山中孝之助 山中北郎 博聞社 武田傳右工門 牧野吉兵衛 牧野善兵衛 鈴木忠藏 森江佐七

東京 同

江嶋喜兵衛 柳川梅次郎 東生龜次郎 東生鐵五郎 小林喜右工門 水野慶二郎 内藤泰次郎 出雲寺萬次郎 石川治兵衛 荒川藤兵衛 辻岡文助 内田彌兵衛 北澤伊八 松崎半造 淺倉久兵衛 岡村庄助 別所平七

浮世物 中ノ叔	南窓文集	遊子方言	娼妃地理	自惚鏡	彙軌本紀	傾城買二筋道	廓社大帳	志川狂記
鬼武他 十通舎无授関	田ノ金巻信	田舎老人他 多田之爺	同 作	同 作	高田金巻著 三層出風巻著	風来山人著	同 作	東澤他
幼孫武他 幼孫武他 幼孫武他	志冊	志冊	志冊	志冊	志冊	二冊	志冊	志冊

伊豆三嶋
相州小田原 同 伊勢原
甲州山梨 同 深谷
武州横濱 同 深谷
同 深谷
同 深谷
同 鴻巢
同 熊谷
同 浦和
同 房州北條
上總茂原
同 東金
同 下總千葉
同 野田
同 佐原

關谷利右五門
米屋忠兵衛
山田淺治郎
内藤傳右五門
吉川伊兵衛
酒井省吾
小野脩三
長嶋爲一郎
松枝悦三郎
藤屋源三郎
山下安民
松田屋清兵衛
丸屋茂兵衛
多田屋嘉左五門
藤屋錠次郎
茂木林藏
正文堂利兵衛

下總水海道
常陸水戸
同 土浦
野州宇都宮
同 橡木
上州前橋
同 高崎
同 高崎
同 桐生
同 伊勢崎
同 館林
同 岩代福嶋
同 若松
同 陸前仙臺
同 石巻
渡嶋箱館

江戸屋伊左五門
北澤安次郎
寺田新助
田野邊忠兵衛
小林八郎
遠藤善平
文心堂
煥平堂
竹内藤吉
川木屋平吉
系屋太吉
齊藤彦太郎
森藤八萬助
齊藤八四郎
伊勢安右五門
山口啓之助
魁文社

東京
同 大坂
同 西京
同 尾州名古屋
同 尾州名古屋
同 同
同 美濃岐阜

青山清吉
磯部太郎兵衛
柳原喜兵衛
松村九兵衛
前川善兵衛
前川源七郎
岡嶋真七
赤志忠七
田中治兵衛
川勝德次郎
片野東四郎
河瀨代助
梶田勘助
栗田東平
鬼頭平兵衛
三浦源介
水谷善七

美濃大垣
同 笠松
同 伊勢津
同 松坂
同 山田
同 三州岡崎
同 豐橋
遠州濱松
同 掛川
同 見附
同 駿州藤枝
同 静岡
同 沼津

岡安慶助
玉井忠造
篠田伊十郎
本屋嘉助
藤原長平
伊藤善太郎
伊藤善文
高須又八
落合清七
白木健二郎
大塚好五郎
古澤良作
遠州屋安兵衛
佐藤俊平
廣瀨市藏
吉成壽三郎
小松浦吉

陸奧青森 同 弘前 同 八戸 同 羽後秋田 羽前山形 同 谷地 同 鶴岡 同 上山 信州長野 同 上田 同 小諸 同

池田吉助 平井客次郎 武田莊七 玉田平治郎 浦山太郎兵衛 本間金之助 市村五郎兵衛 荒井多四郎 八文字屋太左門 田宮五郎 地主文藏 萬屋利七 西澤喜太郎 池田政教 小山九郎兵衛 相場七左門 釜屋儀助

信州松本 越後長岡 同 小千谷 同 高田 同 越中富山 同 高岡 同 福光 加州金澤 同 同 同 大聖寺

高見屋甚左門 上田屋治八 鳥屋十郎 中村作平 小林屋定吉 室直三郎 本田勝太郎 大橋甚吾 土井宇三郎 車野義三郎 清水清左門 中村喜平 近田太平 池善平 近八右門 深城伊三郎

